

当面の国際エネルギー情勢について

ウクライナ危機と中東情勢の視点から

2022年4月7日

(一財) 日本エネルギー経済研究所

小山 堅

不安定化する市場への様々な対応

- OPECプラス：3月31日会合で5月43万b/d増産を発表
 - OPECはロシアとの協調減産を重視。米国・サウジアラビア関係も影響か
- IEAの6,000万バレルの備蓄放出を決定に続き、3月31日、米国がSPRの最大1.8億バレル放出を発表
- 米国、カナダ、英国（年末までに停止）はロシア原油禁輸も先進国の中でも足並みは必ずしもそろわず
 - ウクライナでの民間犠牲者問題で対露スタンスはより厳しい方向へ
- ロシア産石油の買い控え増加、300万B/D生産減の見方も
- 中印の輸入がロシアの輸出減少程度のカギに（中国のコロナかも影響）

注目すべきサウジアラビアの対応

- 最大の余剰生産能力の保有国、サウジアラビアが石油市場安定のカギを握る
- 従来は安全保障と石油市場安定を巡り、米国とサウジアラビアは「特別な関係」に
- 米国の相対的パワー低下、中東からアジアへのシフト、中国の台頭、シェール革命の影響等の構造変化もサウジに影響
- トランプ前政権期の「蜜月」関係から、人権・民主主義重視のバイデン政権下で両国関係は複雑に
- 米欧など消費国からの増産要請にも、計画通りのOPECプラス大での増産を志向
- 万一の供給支障発生時に問われるサウジの対応

当面の国際エネルギー市場をどう見るか

- ロシアのエネルギー供給支障・途絶発生の有無、規模・期間が最大の鍵。その時の世界経済への影響、代替供給の有無・程度でも大きく変わる。
- ウクライナ危機を巡る地政学リスクがそのまま残るが、大規模供給支障・途絶は発生しないシナリオでは、原油価格は100ドル前後を中心に、±20程度の荒い値動き。欧州ガス価格も100万BTU30ドル～50ドル前後で推移。
- 相当規模の供給途絶が発生するシナリオでは、原油・天然ガス共に過去最高値を一気に、大幅に更新する。石油で代替供給が実現すれば価格は低下するが、基本的に高止まり、乱高下。ガスは高価格がそのまま持続し、需給ひっ迫。
- 停戦が実現し、ウクライナ危機が終息に向かうシナリオでは、原油・ガス価格ともに現状より低下。しかし、原油70～80ドル、欧州ガスで20～30ドルを中心とした不安定な推移
- 代替供給源としてのサウジ・UAEの対応、IEA・米国の備蓄対応、米シェール増産、イラン市場復帰の行方、今後の米国LNG増産やカタールの対応等が要注目。世界経済と中国のコロナ禍も重要。